様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：３２６４４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ１２５５８

研究課題名（和文）地域内マネーフローの向上に資する森林バイオマス利活用と観光産業との融合

研究課題名（英文）Study on forest biomass utilization at tourist destination in order to improve money flow in rural area in Japan

研究代表者
田中　伸彦（Tanaka, Nobuhiko）

東海大学・観光学部・教授

研究者番号：７０３５３７６１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：国土の3分の2が森林である日本において、森林バイオマスエネルギーを効果的に観光地で活用するための研究を実施した。成果としては、観光地周辺で森林バイオマスを活用することで、その地域における再生可能エネルギーの活用に貢献することが確認された。そしてそれに留まらず、森林や樹木等の整備が行われる結果、副次的にもたらされる成果として、地域景観の向上、生物多様性の維持管理、地域の雇用の確保、地域内のマネーフロー循環の増加、日常的な人と森林との関わりの増加、公園やスポーツなどを通じた森林空間の活用、バイオマスボイラー等の工学技術の発展などに繋がることも確認でき、多面的な効果に繋がることを明らかにできた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
世界各国で「持続可能な観光」が提唱される昨今、日本でも二酸化炭素排出量の抑制など、環境に配慮した観光のあり方が模索されている。現状では航空機に非化石系燃料を用いるなど、交通面の取り組みが目立つが、デスティネーション(観光目的地)における脱化石燃料、再生可能エネルギーの活用も重要である。その背景を踏まえ、本研究では、日本は森林国であることを鑑み、森林や緑地などから発生する木質系バイオマスを観光目的地で活用する際の効果に着目し研究を遂行した。その結果、景観の向上や、バイオマスボイラーの制作など、再生可能エネルギーの活用による効用に留まらない多面的な効果がもたらされる可能性を指摘することができた。

研究成果の概要（英文）：In Japan where two-thirds was the forest of the country, This project carried out a study to utilize the forest biomass energy effectively at tourist destinations in Japan. As a result, it was confirmed to contribute to increase the utilization of forest biomass as renewable energy by around tourist destinations. Also, as the result that the maintenance such as the forest or the tree was performed, it is subsidiarily clarified that additional improvement, such as maintenance of the nature beauty, conservation of the biological diversity, security of the local employment, increase of the money flow circulation in rural area, the increase of the relation with the daily person's life and forest, utilization as parks or sport fields, the domestic biomass boiler development and so forth. In conclusion, this study clarified that the utilization of the forest biomass in tourist destination will bring the multifaceted effect to rural/ urban areas in Japan.

研究分野：観光学

キーワード：観光　デスティネーションマネジメント　森林バイオマス　再生可能エネルギー　地方創生　農山村　マネーフロー　日本

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

21 世紀に入り、日本は、製造業等に大きく依存していた従来の産業構造から脱却すべく、観光産業を中心としたサービス産業の振興を目指し、「観光立国宣言」を行った。COVID-19 の影響を受ける前であった研究開始当初における観光産業には、①インバウンド旅行による外貨の獲得と、②農山村地域への観光入込み等による地方創生という二本の柱が経済効果として大きく期待されていたが、本研究は、そのうちの後者(地方創生)に関わる研究に位置づけられるものとして研究計画を構成した。

ところで、地方創生が期待される一方で、当時の既存研究(藤山 2015 等)を読み解くと、地域経済における観光産業の規模は農山村では思いのほか小さい上、都会の旅行業者へのコミッションフィーや、エネルギー (暖房や温浴等)、資材・食料等の調達に費用がかかり、観光業がもたらす農山村への流入額よりも、観光業を行うために域外に流出する額の方が大きいという逆転現象さえ生じる可能性があることが指摘されていた*1。

（*1 例えば、平成 15 年の島根県津和野地域における分析では、観光関連業は地域産業全体の約 1.5%に留まり、世界平均（約 1 割）の 7 分の 1 程度であった。）

要するに、地方創生を目指した観光振興を実現するためには、当時行政施策が数値目標としていた「域内への来訪者数」を単純に増やすだけでは実質的な効果が生じるか否か不確かであった。むしろ、農山村への①流入額を確保した上で、②域外流出額を抑え、③域内のマネーフローを安定かつ潤沢化するための社会システムの構築が必要であり、そのための研究が求められていると考えられた(田中 2018)。

上記を鑑み、本課題では「②域外流出額の抑制」に着目した上で、「①流入額の確保」にも派生的に貢献する社会システムの構築を目指す際に、「地域における森林バイオマスを観光産業と融合させ、効果的に利活用することが有効ではないか？」という「問い」に思い至った。そして本研究課題の成果を「観光とバイオマス利活用との融合可能性マトリクス」としてとり纏め、自然風景地や林業地、里地里山などに類型化される日本国内の農山村において「③旅行によるマネーフローを農山村が獲得するだけに留まらず、農山村社会の多角的な機能の向上が期待できる地方創生メニューの提言を試みる」ことをアウトカムに据えて、研究を遂行したいと考えた。

２．研究の目的

本研究の目的は、地方創生の牽引役として期待されている①日本の観光産業に森林バイオマスの利活用を効果的に融合させることで、②旅行によるマネーフローを農山村が獲得するだけに留まらず、農山村社会の多角的な機能向上が期待できる地方創生メニューを纏め、提言する研究を行うことにある。

上述したが、現在日本は観光立国を宣言し、観光産業には、①インバウンド旅行による外貨の獲得と、②農山村地域への観光入込み等による地方創生という二本柱の経済効果が期待されるようになったが、本研究は後者に関わる研究に位置づけられる。

３．研究の方法

調査手法は、日本各地の農山村から抽出した主要調査地を対象としたフィールドワーク調査と資料分析である。

それらの結果をもとに「観光とバイオマス利活用との融合可能性マトリクス」を作成し、適用可能性を実地検証して一般化を行い、地域特性の異なる各地の農山村に広く応用可能な「観光―バイオマス融合」地方創生メニューをとり纏め、提言を行った。

４．研究成果

（１）観光とバイオマス利活用との融合性の検討

現実の農山村で、観光振興と森林バイオマスの利活用との融合を図るということは、単に観光に木材を使用するということに留まらない。両者には実に多角的で深い関係がある。例示するだけでも表１のとおり、エネルギー、観光、経済、景観、環境、コミュニティなどへの効果が想定され、多角性は幅広いと考えられた。

表1　多角的な観光とバイオマス利活用との癒合可能性（一例）

経済効果	地域バイオマスの活用による域内資金の流出軽減
	バイオマス産業起業による雇用創出
観光効果	整備された農山村を活用したエコ/グリーンツーリズムの推進
	視察観光等によるバイオマス産業自体の観光デスティネーション化
	温泉地等への温熱供給
	遭難防止や大型獣被害防止等による観光客への安全確保
林業効果	放置された未利用林地残材の活用
	森林の多面的機能の向上
景観効果	未整備林やササ薮等マイナスの景観の除去
	お花畑やホタルの復活等によるプラスの景観の創出
環境効果	地元再生可能エネルギーの活用
	化石燃料の利用低減による二酸化炭素排出量の抑制
	再生可能エネルギーの活用よる地域環境ブランド価値の向上
コミュニティ効果	地元住民が自然に対して関心を向ける地域アイデンティティ効果
	児童生徒が地元の自然に関心を持つ教育効果

（２）調査期間と調査方法・対象

この様な前提とすべき仮説を念頭に置いて、本調査では 2019 年度から 2022 年度にかけての 4 年間を通じてフィールドワーク調査と資料分析を実施した。

なお、当初の予定では、本課題は 2019 年度から 2021 年度までの 3 年間で実施する予定であったが、2019 年度末からの新型コロナウイルスの蔓延の影響で十分にフィールドワークに出ることができない状態が続いたため、2022 年度まで 1 年間研究期間を延長するとともに、外出制限期間においては当初予定していた遠隔地へのフィールド調査が十分行えなかったため、東京都内の明治神宮やガーデンツーリズム登録対象地を調査対象に加え、調査を実施することとした。年度ごとの主なフィールド調査対象地は表 2 のとおりである。

表2　年度ごとの主要調査対象地

2019年度	北海道下川町
	軽井沢地区(長野県軽井沢町･群馬県長野原町など)
	ガーデンツーリズム対象地〔北海道ガーデン街道〕　など
2020年度	北海道弟子屈町
	長野県茅野市
	愛媛県内子町
	東京都渋谷区(明治神宮〕　など
2021年度	埼玉県三芳町(三富地域)
	千葉県南房総市　など
2022年度	岐阜県大垣市
	福島県三島町
	群馬県中之条町
	岩手県八幡平市　など

（３）バイオマス利活用が観光にもたらす諸効果の実証

各年度の調査の結果、まず、バイオマス利活用が観光にもたらす主要な諸効果の事例を表 3 のとおり纏めることができた。この結果を解釈すると、「地方創生の牽引役として期待されている日本の①観光産業に森林バイオマスの利活用を効果的に融合させることで、②旅行によるマネーフローを農山村が獲得するだけに留まらず、農山村社会の多角的な機能向上が期待できる」という研究開始当初に設定した仮説は、①経済効果、②観光効果、③林業効果、④環境効果、⑤コミュニティ効果という全ての側面で実例が観察されることが明示され、仮説は支持されるという結論に至ることができた。

表3　観光とバイオマス利活用との融合マトリクス（主要事例の抜粋）

効果の類型	融合可能性	主な観察実例
経済効果	域内資金流出軽減	地元木質バイオマスを活用した市街地への温熱供給(北海道下川町)
	雇用創出	国産バイオマスボイラー開発のための企業(岐阜県大垣市)
		道の駅の開業(千葉県南房総市)
観光効果	ツーリズムの推進	エコツーリズムの推進(長野県軽井沢町･北海道弟子屈町)
		キャンプ場での活用(群馬県長野原町)
		博物館への温熱供給〔福島県三島町〕
	バイオマス産業観光	バイオマス発電の視察観光の実施〔愛媛県内子町〕
	温泉活用	バイオマスボイラーの温浴施設への導入〔群馬県中之条町〕
		国立公園での地熱利用の併用(岩手県八幡平市)
		森林環境を活用した宿泊温泉観光地の再生(北海道弟子屈町)
	観光客安全確保	クマなど野生動物の生息管理(長野県軽井沢町)
林業効果	林地残材活用	地域残材の活用(北海道下川町･愛媛県内子町･長野県茅野市他多数)
	多面的機能向上	域内バイオマスのたい肥化による生態系管理〔東京都明治神宮〕
環境効果	再生可能エネルギー活用	木質バイオマスの活用(北海道新川町他多数)
		森林地域における地熱発電(岩手県八幡平市)
	二酸化炭素の削減	旅館等における石油ボイラーの利用削減〔群馬県中之条町〕
		農業温室における木質ボイラーの導入と地産地消〔千葉県南房総市〕
	環境ブランドの向上	神聖な森林空間の創出〔東京都明治神宮〕
		産廃施設における環境保全(埼玉県三芳町)
コミュニティ効果	地域アイデンティティ	観光対象地としてのブランド化〔北海道ガーデン街道〕
		バイオマスタウンとしての住民意識の向上(北海道下川町)
	教育効果	地元住民に対する環境教育(埼玉県三芳町)

（４）『観光―バイオマス融合』を効果的に実現するための地方創生メニューの提言

この様に、観光産業と森林バイオマスの利活用との融合が、導入地域にプラスの効果をもたらす可能性が明らかになったため、本課題では、引き続き「『観光―バイオマス融合』を効果的に実現するための地方創生メニュー」を提言するための考察を行った。考察を行うにあたっては、森林バイオマスを供給する側の立場からの調査として、岐阜県大垣市に拠点を置くバイオマスボイラーの開発設置業者である「株式会社　森の仲間たち」を、森林バイオマスを利活用する立場からの調査として、群馬県長野原町に拠点を置く「有限会社　きたもっく」を対象とした先進事例の調査を実施した。

結果として、「株式会社　森の仲間たち」においては、

①「木の駅 × 薪ボイラーの地域循環モデル」として、地域の山に放置されていた木（林地残材）が「木の駅」を通して薪となり地域の燃料になり、山がきれいになり、地域も元気になるモデル、

②「地域 × エネルギーローカルビジネスモデル」として、間伐材や製材所の端材などを薪ボイラーで燃やして地域に熱（エネルギー）として供給し、化石燃料だけに頼らない持続可能な地域と新たな雇用が生みだすモデル、

③「里山 × 福祉のイキイキモデル」として、社会福祉施設の利用者が自分たちの使うお湯を自分たちでつくり出す薪ボイラーが、施設利用者にとって有意義な仕事を生み出し、施設の利用者が山から利用まで一連の流れを行うことで、就業トレーニングの場を広げるモデル、

④「上下流域連携の地域間交流モデル」として、川の上流の山間地域で作った薪を下流の都市で燃料として利用するモデルです。燃料供給を通じて地域間の人的、経済的な交流を生むとともに、「同じ流域」や合併市町村内の絆が深まるモデル、

⑤「身近な木材のカスケード利用モデル」として、製材所や工務店などで処理に困る端材やおが屑などを、自社内で燃料として有効活用するモデル、

⑥「地域資源を生かした自給自足モデル」として、身近にある木材を地元のキャンプ場や農業用ハウス、自宅などの暖房や給湯に活用することで、燃料代を減らしながら地域への貢献が

期待できるモデル

という、計 6 つのモデルを想定して、地方創生メニューを検討していることが明らかとなり、全国に遡及可能な内容であることを確認できた。また、具体的にこのモデルを念頭において、「株式会社　森の仲間たち」では、2022 年 11 月現在で、福島県から熊本県までの全 18 か所がバイオマスの利活用地として実現化されていて、そのうち 11 か所では、温泉を中心に観光関連施設に導入されていることが明らかとなった。

「有限会社　きたもっく」は、1994 年にキャンプ場を開業したことに端を発する会社であるが、21 世紀に入ってから自らの企業ドメインを「地域未来創造事業」と位置づけ、雪や森を活用した観光アクティビティ事業、森のギャラリーの運営、薪ストーブの設置メインテナンス、薪自体の供給、ライラックの森の植栽管理、ハチミツの生産など、アウトドアフィールドを活用し、薪の活用を中心に多様なバイオマスや森林空間の活用を組み合わせ、持続可能なフィールド運営が、観光のデスティネーションマネジメントの面からも可能であることを実証している事例であると位置づけられた。

（５）まとめ

以上、地方創生の牽引役として期待されている①日本の観光産業に森林バイオマスの利活用を効果的に融合させることで、②旅行によるマネーフローを農山村が獲得するだけに留まらず、農山村社会の多角的な機能向上が期待できる地方創生メニューを纏め、提言する研究を行うことができた。

観光とバイオマス利活用との融合性については、フィールドワーク調査および資料調査に基づき多様な実例があることが確認され、それに対応する地域活性化メニューも各地で実践されている状況にあることが確認できた。

加えて、日本は国土の 3 分の 2 が森林であり、また国土の半分近くが里地里山と呼ばれる地域に該当する点からの考察も行うことができた。要するに、バイオマス供給の面からも、観光デスティネーションづくりの面からも、森林や里地里山を、どの様に観光活用していくのかという点において、依然大きな伸びしろがあるということも同時に確認できた。

本科研費の研究課題は 2022 年度をもって終了するが、今後も継続的にこの研究を実施していき、「農山村地域への観光入込み等による地方創生」という観光立国の大きな目的を達成するためのエビデンスを積み上げていく必要があると考えられた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計17件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 Reiko MACHIDA, Yuya MIKAMI, Waya KOBAYASHI, Nobuhiko TANAKA, Teruaki IRIE, Hijiri SJIMOJIMA, Tomohiro KIMATA, Shigeyuki MIYABAYASHI	４．巻 8
２．論文標題 THE IMPACT OF THE COVID-19 PANDEMIC ON RESORT AREAS AND ITS RELEVANT TO AGRICULTURAL MARKETS -A CASE STUDY OF KARUIZAWA, NAGANO PREFECTURE, JAPAN	５．発行年 2022年
３．雑誌名 8th Int. Conf. on Structure, Engineering & Environment (SEE), Mie, Japan	６．最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 田中伸彦	４．巻 76(8)
２．論文標題 ランドスケープの文化的価値を観光振興に活かす	５．発行年 2022年
３．雑誌名 新都市	６．最初と最後の頁 6-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 田中伸彦	４．巻 1351
２．論文標題 ガーデンツーリズムを通じた新たな日本庭園様式の誕生に期待	５．発行年 2023年
３．雑誌名 造園連新聞	６．最初と最後の頁 6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 髙橋美里，田中伸彦	４．巻 98
２．論文標題 国立公園の位置する地域が国立公園を観光利用してきた歴史を確認する ： 戦前期の十和田八幡平国立公園八幡平地区旧松尾村を対象として	５．発行年 2022年
３．雑誌名 レジャー・レクリエーション研究	６．最初と最後の頁 76-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田中伸彦	4．巻 83(5)
2．論文標題 COVID-19 が観光に及ぼした影響と新たな観光のあり方	5．発行年 2021年
3．雑誌名 ランドスケープ研究	6．最初と最後の頁 246-249
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田中伸彦	4．巻 1332
2．論文標題 千樹萬幹　観光と造園・園芸	5．発行年 2021年
3．雑誌名 造園連新聞	6．最初と最後の頁 1
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 寺田徹・田中伸彦・竹内智子	4．巻 136
2．論文標題 明治神宮1920＋100＜最終回＞　④過去からの継承、未来への展望	5．発行年 2020年
3．雑誌名 LANDSCAPE DESIGN	6．最初と最後の頁 113-118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田中伸彦	4．巻 2020年10月24日版文化欄
2．論文標題 邸園文化の楽しみ 多彩な自然と歴史の重なり 観光客集め地域活性化効果も	5．発行年 2020年
3．雑誌名 公明新聞	6．最初と最後の頁 5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田中伸彦・武田惇奨	4．巻 91
2．論文標題 ポストコロナに向けた農山村の「住んでよし、訪れてよし」観光地づくり　―「新しい日常における森林活用の意向調査」の結果を参考に―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 レジャー・レクリエーション研究	6．最初と最後の頁 100-103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田中伸彦	4．巻 2020年12月28日版
2．論文標題 もうすぐ初詣！ 明治神宮でやってみたい「ブラタモリ式」参拝方法とは	5．発行年 2020年
3．雑誌名 URBAN LIFE METRO	6．最初と最後の頁 1-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田中伸彦	4．巻 34
2．論文標題 観光産業に対する地域バイオマス利活用の効果　―観光と森林バイオマス利活用との融合可能性マトリクスの検討―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本観光研究学会全国大会学術論文集	6．最初と最後の頁 233-236
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田中伸彦	4．巻 83（4）
2．論文標題 観光と地域制緑地	5．発行年 2020年
3．雑誌名 ランドスケープ研究	6．最初と最後の頁 378-381
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田中伸彦	4．巻 109
2．論文標題 おもてなしの「みどり」とランドスケープ	5．発行年 2019年
3．雑誌名 都市緑化技術	6．最初と最後の頁 6-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田中伸彦	4．巻 80(5)
2．論文標題 ガーデンツーリズムの可能性と課題	5．発行年 2020年
3．雑誌名 公園緑地	6．最初と最後の頁 5-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小島周作・町田怜子・服部勉・田中伸彦	4．巻 83（5）
2．論文標題 市街化調整区域における里地里山の土地利用に対する住民意識と行政施策 の比較	5．発行年 2020年
3．雑誌名 ランドスケープ研究	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田中伸彦	4．巻 80(2)
2．論文標題 景観と観光資源	5．発行年 2019年
3．雑誌名 ランドスケープ研究	6．最初と最後の頁 166
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 田中伸彦	４．巻 2019
２．論文標題 自然を活用した持続可能な観光による地方創生を目指して	５．発行年 2020年
３．雑誌名 東海大学研究者ガイド2019	６．最初と最後の頁 138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計28件（うち招待講演　20件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 田中伸彦
２．発表標題 「「森林サービス産業」：エビデンス収集から社会実装 への転換期に森林科学はどのように貢献できるのか？」コメンテーター
３．学会等名 第134回日本森林学会大会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 柴田晋吾，田中伸彦，須藤修，佐々木慶，ラーワー フレデリック アイザック，楠部真也
２．発表標題 パネルディスカッション「山形らしい森林サービス産業の創出に向けて」
３．学会等名 山形県 令和4年度やまがた森林ノミクス県民ミーティング（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 田中伸彦
２．発表標題 基調講演「新たな森と人との関わりを生み出す森林サービス産業の魅力」
３．学会等名 山形県 令和4年度やまがた森林ノミクス県民ミーティング（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 田中伸彦
２．発表標題 持続可能な観光地管理に資する森林バイオマス利用の可能性
３．学会等名 レジャー・レクリエーション学会第52回学会大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 髙橋美里，田中伸彦
２．発表標題 国立公園の位置する地域が国立公園を観光利用してきた歴史を確認する ： 戦前期の十和田八幡平国立公園八幡平地区旧松尾村を対象として
３．学会等名 レジャー・レクリエーション学会第52回学会大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 田中伸彦
２．発表標題 実践から読み解く風景計画の理論 コメンテーター
３．学会等名 日本造園学会2022年度全国大会 研究推進委員会フォーラム４（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 田中伸彦
２．発表標題 空間・環境： 自然に生きることのかたち
３．学会等名 日本レジャー・レクリエーション学会第51回学会大会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 田中伸彦
２．発表標題 「新しい日常における森林活用の意向調査」の結果から
３．学会等名 林業経済学会・東京農業大学総合研究所研究会２部会（農村計画研究部会、地域再生研究部会）主催シンポジウム「新型コロナ（covid-19）後の森林活用を考える：“ 森林サービス産業 ”の観点から」（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 TANAKA Nobuhiko
２．発表標題 Space/ Environment: Mold/ Form of Living Naturally
３．学会等名 Academy of Leisure Science Africa （ALSA） Virtual International Congress（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 田中伸彦
２．発表標題 計画・経営技術のレガシー
３．学会等名 明治神宮鎮座百年祭記念シンポジウム 「100年の森で未来を語る Mの森連続フォーラム 第二章 MORI×MAGOKORO」（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 田中伸彦
２．発表標題 新しい日常における農山村移住と観光レクリエーション
３．学会等名 地域デザイン学会 第7回農業文化フォーラム（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 田中伸彦・武田惇奨
２．発表標題 森林・林業への影響　「新しい日常における森林活用の意向調査」の報告を中心に
３．学会等名 農村計画学会「コロナ禍の農山漁村における現状と課題～農村計画学会新型コロナタスクフォース中間報告ZOOM報告会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 田中伸彦・武田惇奨
２．発表標題 ポストコロナに向けた農山村の「住んでよし、訪れてよし」観光地づくり　―「新しい日常における森林活用の意向調査」の結果を参考に―
３．学会等名 日本レジャー・レクリエーション学会 第50回記念大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 田中伸彦・武田惇奨
２．発表標題 「新しい日常における森林活用の意向調査」の概要 について
３．学会等名 第132日本森林学会大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 田中伸彦
２．発表標題 必要な構成要素と計画の考え方
３．学会等名 国土交通省　ガーデンツーリズム登録審査説明会2021（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 田中伸彦
２．発表標題 ニューノーマル時代の森に対する期待
３．学会等名 林野庁　オンラインセミナー　Have a Good MoriDAY　～ニューノーマル時代の森林への期待～（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 田中伸彦
２．発表標題 公園行政における観光政策
３．学会等名 令和2年度公園緑地講習会（一般社団法人日本公園緑地協会主催）（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 田中伸彦
２．発表標題 日本の自然環境の価値と意味
３．学会等名 環境省　令和2年度自然資源を活かすエコツーリズム・インタープリテーションの人材育成支援事業　自主学習オンライン必修講義（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 田中伸彦
２．発表標題 「地域循環経済」視点での「森林サービス産業」事業構想のあり方
３．学会等名 「森林サービス産業」フォーラム＆ワークショップ（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 田中伸彦
２．発表標題 「テーマ別観光」が地域の空間利用や資源・経済循環にもたらす影響
３．学会等名 日本レジャー・レクリエーション学会第49回学会大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 田中伸彦
２．発表標題 緑のレガシー　～明治神宮とオリンピック・パラリンピック～
３．学会等名 2020明治神宮100年の森記念講座（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 TANAKA Nobuhiko
２．発表標題 How the “Tourism-based Country Promotion Policy” Effects Japanese Nature-Based Tourism
３．学会等名 XXV IUFRO World Congress 2019　(Curitiba, Brazil)（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 田中伸彦
２．発表標題 パネリスト　ガーデンツーリズムのこれから
３．学会等名 国土交通省　北海道ガーデン街道10周年記念　ガーデンツーリズムセミナー　ガーデンツーリズムの先進事例に学ぶ（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 田中伸彦
２．発表標題 東京五輪において観光が造園に期待すること
３．学会等名 公益社団法人日本造園学会関東支部　第15回学生デザインワークショップ　サマースタジオ2019　（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 小島周作・田中伸彦・町田怜子・服部勉・麻生恵
２．発表標題 平塚市の市街化調整区域が里地里山地域の土地利用に与えた影響
３．学会等名 2019年度日本造園学会全国大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 田中伸彦
２．発表標題 コメンテーター　生活と風景　風景・文化・信仰のダイアグラム
３．学会等名 2019年度日本造園学会全国大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 田中伸彦
２．発表標題 日本の自然環境の価値と意味
３．学会等名 令和元年度自然資源を活かすエコツーリズム・インタープリテーションの人材育成支援事業セミナー（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 田中伸彦
２．発表標題 観光振興とランドスケープ
３．学会等名 国土交通大学校　専門課程 公園・緑化研修（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計11件

１．著者名 田中伸彦	４．発行年 2023年
２．出版社 公益財団法人 森林文化協会	５．総ページ数 148
３．書名 森林環境2023　（担当範囲:鎮座１００年を迎えた明治神宮を さらに１００年支えていくための課題）	

１．著者名 水内祐介・小林邦隆・田中伸彦・竹内智子・上田裕文	４．発行年 2023年
２．出版社 鹿島出版会	５．総ページ数 334
３．書名 明治神宮100年の森で未来を語る ： Mの森連続フォーラム全記録　（担当範囲『林苑計画書』から読み解く森の未来）	

１．著者名 田中伸彦	４．発行年 2023年
２．出版社 鹿島出版会	５．総ページ数 334
３．書名 明治神宮100年の森で未来を語る ： Mの森連続フォーラム全記録　（担当範囲:明治神宮の空間計画・経営戦略のレガシーを100年後に残すために）	

１．著者名 田中伸彦	４．発行年 2022年
２．出版社 国土交通省国土交通大学校	５．総ページ数 37
３．書名 国土交通省 令和4年度 専門課程 公園・緑化研修テキスト 「観光振興とランドスケープ 」	

１．著者名 田中伸彦	４．発行年 2021年
２．出版社 国土交通省　国土交通大学校	５．総ページ数 35
３．書名 国土交通大学校　令和3年度専門課程公園緑化研修テキスト　『観光振興とランドスケープ』	

１．著者名 森林環境研究会編　（田中伸彦分担執筆）	４．発行年 2021年
２．出版社 公益財団法人森林文化協会	５．総ページ数 69
３．書名 『森林環境2021　特集・森林と自然エネルギーを再考する』　「ポストコロナ時代の観光のカタチ」を分担執筆	

１．著者名 一般社団法人日本森林学会編　（田中伸彦分担執筆）	４．発行年 2021年
２．出版社 『森林学の百科事典』　「森林を楽しむ活動」を分担執筆	５．総ページ数 694
３．書名 丸善	

1．著者名 明治神宮とランドスケープ研究会編　（田中伸彦分担執筆）	4．発行年 2020年
2．出版社 東京都公園協会	5．総ページ数 128
3．書名 『『林苑計画書』から読み解く　明治神宮一〇〇年の森』　「イヌツゲ　～聖と俗の「境界」をつくる～」を分担執筆	

1．著者名 明治神宮とランドスケープ研究会編　（田中伸彦分担執筆）	4．発行年 2020年
2．出版社 東京都公園協会	5．総ページ数 128
3．書名 『『林苑計画書』から読み解く　明治神宮一〇〇年の森』　「近代化・西欧化を象徴する明治神宮外苑」を分担執筆	

1．著者名 田中伸彦	4．発行年 2020年
2．出版社 森林文化協会	5．総ページ数 74
3．書名 森林環境研究会編著、原田一宏+井上真責任編集『森林環境2020　暮らしの中の熱帯』　「ガーデンツーリズムに期待される地域振興」を分担執筆	

1．著者名 田中伸彦	4．発行年 2019年
2．出版社 国土交通省　国土交通大学校	5．総ページ数 25
3．書名 令和元年度　専門課程 公園・緑化研修テキスト 「観光振興とランドスケープ。	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関